様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００３３９

研究課題名（和文）〈文化主義〉による〈国民文化〉と〈地方文化〉の展開――嶺雲・小波・竹風を中心に

研究課題名（英文）The Development of National Culture and Local Culture by Culturalism, Focussing on Reiun, Sazanami and Chikufu

研究代表者
林　正子（HAYASHI, Masako）

岐阜大学・地域科学部・非常勤講師

研究者番号：３０１９８８５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、近代日本の〈文化主義〉提唱におけるドイツ思想・文化からの影響と、地方文化と国民文化の関係性の一端を明らかにした。具体的には、田岡嶺雲が社会批評家・詩人としてのハイネ像をもとに展開した日本文明批評や、巌谷小波のお伽噺におけるメルヘンの影響について論じた。併せて、巌谷小波と木村小舟の作品を分析することによって、中央文壇からの地方文壇への影響の一面を明らかにした。関連して、小木曾旭晃の雑誌『地方文化』における地方文化論の有意義性を論じた。
　さらに、森鴎外の「標準於伽文庫」編纂の意義を論じ、鴎外文学の登場人物の内面を投影する「分身」的存在についてハイネとの類縁性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、田岡嶺雲、巌谷小波、森鴎外らの論説・作品をドイツ思想・文化の受容の観点から考察する研究である。近代日本のドイツ系知識人たちによる〈文化主義〉提唱について、文学ジャンルにおいては（鴎外を除き）まとまった研究はなされていない現状において、先駆的な意義を有すると言える。
　また、大正期の〈文化主義〉隆盛を受けての〈地方文化〉と〈国民文化〉の関係性を、岐阜県出身の文化人、小木曾旭晃、木村小舟の論説によって明らかにすることも、従来の研究にはなかったテーマである。ローカル・メディアが〈中央〉のジャーナリズムに対するオルタナティヴとして機能していたことを論じたことは、社会的な意義を有すると考える。

研究成果の概要（英文）：　This study clarified some of the influences of German thought and culture on the advocacy of "culturalism" in modern Japan and the relationship between local culture and national culture. Specifically, we discussed the critique of Japanese civilization developed by Taoka Reinun based on his image of Heine as a social critic and poet, and the influence of fairy tales on the works of Iwaya Sazanami. In addition, this study also clarified one aspect of the influence of the central literary world on the local literary world by analyzing the works of Iwaya Sazanami and Kimura Shoushu. Relatedly,we discussed the significance of Kogiso Kyokko's theory of local culture in his magazine "Chihou Bunka".
　Finally, we discussed the significance of Mori Ogai's compilation of the "Hyoujun Otogi Bunko" (The Library of Exemplary Fairy Tales) and clarified the similarity with Heine regarding the existence of "alter egos" who project the inner lives of the characters in Ogai's literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：国民文化　地方文化　文化主義　田岡嶺雲　巌谷小波　小木曾旭晃　木村小舟　森鴎外

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）本研究の背景については、明治・大正期に受容されたドイツ思想・文化を媒介として、近代日本の知識人たちが、〈国民国家〉確立期における〈国民文化〉構築の重要性について認識し、その発展に寄与したことが挙げられる。すなわち、当時の国情や知識人の意識が、近代日本におけるドイツ思想・文化受容とその表現形態や発展の軌跡に反映すると同時に、ドイツ思想・文化受容の成果そのものが、〈国民精神〉の基盤を構築することによって、相互の響き合いによる〈国民文化〉の価値創造を実現させたのではないか、ということである。

（2）日清・日露戦争以降、国民国家確立期とされる時代の文学者の〈国民文化〉論を考察することは、その時期から一世紀以上を経てのグローバル時代の文学研究において、すなわち、〈国民国家〉のあり方が問われている現代の日本近代文学研究において、重要な課題のひとつであると考えられる。ドイツ留学・滞在体験をとおして、ないしは、英語・ドイツ語文献をとおしてドイツ思想・文化を受容した、田岡嶺雲、巖谷小波らによる〈国民文化〉についての認識の深化を読み解き、さらにその〈文化主義〉の展開が、〈昭和維新〉と称された〈新国民文化の建設運動〉に向かった道程を明らかにするという、現代日本の地方と中央との関係性の熟考にも繋がる〈問い〉は、管見によれば従来の研究にはないテーマである。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、博文館『太陽』をはじめ明治・大正期の代表的総合雑誌に掲載された田岡嶺雲、巖谷小波らの論説におけるドイツ思想・文化受容の意義を考察することによって、大正期の〈文化主義〉提唱にいたる歴史的・思想的背景について明らかにすることである。

（2）出身地の岐阜で論陣を張った小木曽旭晃による『地方文芸史』（教育新聞発行所 1910年）などを参照し、〈国民文化〉創成に寄与した博文館『太陽』の地方読者への影響の諸相を調査研究することによって、ドイツ思想・文化からの影響のもとに展開された大正期の〈文化主義〉提唱が、昭和期の〈地方文化運動〉に果たした役割を明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

（1）田岡嶺雲について、博文館『太陽』におけるハインリヒ・ハイネ紹介記事「厭世詩人ハインリッヒ、ハイ子」（第2巻第23号）、「厭世詩人ハイ子（承前）」（第2巻第24号）、「厭世詩人ハイ子（完結）」（第2巻第25号）などをおもな考察対象とし、日本におけるハイネの最初の紹介者である嶺雲が、社会批評家としてのみならず詩人としてのハイネ像を浮き彫りにしていることを明らかにする。このような近代日本における感傷的「厭世詩人」としてのハイネ像の成立に果たした嶺雲の役割とともに、「聖霊の一兵士」、「人道の一兵士」という表現のもと、「ヒューマニティ解放のための戦士」というハイネ観を示したことに注目し、近代日本の文明がきわめて悲惨な貧民生活を生み出したことを批評する嶺雲の評論の再考・再評価を試みる。

（2）巖谷小波は、幼年時代に兄の巖谷立太郎が留学先のドイツから送ってきた『オットーのメ

ルヘン集』に啓発され、明治24（1891）年、日本の児童文学の劈頭を飾ることになった処女作『こがね丸』を博文館「少年文学叢書」第一編として出版している。明治33（1900）年から35（1902）年にかけてベルリン大学東洋語学校講師として赴任した小波が、帰国後に『太陽』に発表したドイツ・メルヘンと日本のお伽噺に関する論説「メルヘンに就て」（第4巻第10号）、「漣山人の日本お伽話」（第6巻第2号）などをおもな考察対象とする。

小波は、批評家待望論が展開されている時代状況下、「批評家に望む」（『讀賣新聞』1887年4月3日）を執筆し、レッシングのような真の批評家とはまったく反対に、作者に阿諛便佞する日本の批評家は「卑怯」で「腰抜」であるという批判を展開していることから、小波の〈メルヘン〉〈お伽噺〉論におけるドイツ評論からの影響について具体的に考察する。

（3）博文館の少年雑誌『少年世界』に投稿し、明治33（1900）年には編集者として博文館に入社した木村小舟への巌谷小波からの影響を明らかにする。『少年世界』に掲載された「胡蝶船旅行」（1898年）、「雪姫物語（科学的お伽噺）」（1898年）、「蟻の旅（お伽噺）」（1899年）など10数編に上る小舟の作品を小波作品と併せて分析することによって、近代日本の文明批評を体現する〈お伽噺〉へのドイツ・メルヘンからの影響を具体的に考察するとともに、中央文壇（巌谷小波）からの地方読者（木村小舟）への影響の一面を明らかにする。

（4）〈文化主義〉提唱が昭和期の〈地方文化運動〉に果たした役割を明らかにするために、明治30（1897）年から43（1910）年までの地方文壇の状況を描いた小木曽旭晃による『地方文芸史』（教育新聞発行所 1910年）などを参照し、〈国民文化〉創成に寄与した博文館『太陽』の地方読者への影響の諸相について調査研究する。旭晃が主宰した岐阜県の総合文芸雑誌『地方文化』（1946年7月1日＝創刊号～1949年9月10日＝第33号 毎月1回発行（合併号を含む） A5判 20頁）の記事を詳細に分析することによって、〈国民文化〉の向上をめざす〈文化運動〉としての地方の状況を精査し、〈地方文化〉が〈国民文化〉を創出するという論調の由来と必然性を明らかにする。

４．研究成果

次のような研究内容を、別項に記載した論文と口頭報告において公表し、近代日本の文学におけるドイツ思想・文化受容の意義、近代日本の文化状況を問い直す際の〈地方文化〉論という視座の有効性を提示した。

（1）小木曾旭晃と総合文芸雑誌『地方文化』（1946 年 7 月から 1949 年 9 月まで 33 号）に関する研究について、明治 30（1897）年から 43（1910）年までの地方文壇の状況を描いた旭晃の著書『地方文芸史』（1910 年）、自伝『逆境に苦闘して』（1932 年）と『逆境の恩寵』（1961 年）等を参照し、田岡嶺雲、巌谷小波らのドイツ思想・文化受容による論説・作品などから導き出された〈文化主義〉の提唱が、昭和期の〈地方文化運動〉の展開をもたらした様相を明らかにした。

すなわち、旭晃が雑誌『地方文化』において、〈国民文化〉に対する〈地方文化〉が〈国民文化〉の下位概念ではなく、オルタナティヴとしての意義を有することを主張していること、〈敗戦国〉による〈文化国家〉建設の前提として、それぞれの〈地方〉が発展してこそ〈文化国家〉が成立するという信念にもとづく〈地方文化〉論を展開していることを明らかにした。

さらに、占領期の〈地方文化〉論の隆盛が、1940 年代前半の〈新国民文化の建設運動〉に接合するとともに、文化を向上・発展させることを人間生活においての最上の目的とする〈文化主義〉のもと、〈地方文化〉が〈国民文化〉の創出に寄与することを志向した状況を確認した。

(2) 近代日本の〈文化主義〉提唱におけるドイツ思想・文化からの影響を明らかにするために、田岡嶺雲については博文館『太陽』掲載のハインリヒ・ハイネ紹介記事を主な対象として、嶺雲が社会批評家としてのみならず詩人としてのハイネ像を浮き彫りにすることによって日本文明批評を繰り広げていることを論じた。

(3) 巌谷小波については、彼の〈メルヘン〉〈お伽噺〉論におけるドイツ・メルヘンの作品・評論からの影響について論じた。併せて、博文館の少年雑誌『少年世界』に投稿し、明治 33(1900) 年には編集者として博文館に入社した木村小舟（小木曾旭晃と同じく岐阜県出身）への巌谷小波からの影響を明らかにした。具体的には、『少年世界』に掲載された小舟作品を小波作品と併せて分析することによって、近代日本の文明批評を体現する〈お伽話〉へのドイツ・メルヘンからの影響、中央文壇（小波）からの 地方文壇（小舟）への影響の一面を明らかにした。

(4) 少年時より巌谷小波に傾倒した木村小舟が、〈地方文化〉の育成のために「岐阜通俗圖書館」を設立し、〈少国民文化〉の創生に寄与した業績を明らかにするとともに、小波自身については、近代日本〈国民童話〉におけるドイツ文化受容の意義という観点から、小波がめざしたのは、ドイツの民族精神による文化的共通性の追求というグリム童話の意義を範とした、近代日本における〈子どものための文学〉というお伽噺の確立であったことを論じた。

(5) 巌谷小波が森鴎外に宛てた書簡の考察を通して、自作『こがね丸』（博文館 1891 年 1 月）への序文執筆を鴎外に依頼した経緯を明らかにし、『日本昔噺』 『日本お伽噺』 『世界お伽噺』 『世界お伽文庫』 などの小波の業績からの刺激を受けて編纂された「標準於伽文庫」の鴎外文業における意義を論じた。

さらに、鴎外におけるドイツ思想・文化受容の意義としては、鴎外文学の主人公ないしは登場人物の内面を投影する〈分身〉的存在、あるいは〈もう一人の自己〉として客観的に自己を眺める視点が、ハインリヒ・ハイネの〈分身という発想〉〈覆面の男〉というモチーフとの類縁性を有することを考察した。

(6) ドイツのメルヘンを受容した巌谷小波との交流・往来が、「標準於伽文庫」編纂という鴎外最晩年の文業を成立させた一要因であることを論じた。さらに、「標準於伽文庫」編纂の発案者である馬淵冷佑の国語教育・児童文学者としての業績を確認するとともに、「標準於伽文庫」編纂における鴎外、鈴木三重吉、松村武雄のそれぞれの役割を踏まえた上で、「標準於伽文庫」編纂に関する鴎外の意図、さらに鴎外の文業全般における「標準於伽文庫」の意義を明らかにした。

加えて、『しがらみ草紙』第 20 号　1891 年 5 月）に「鴎外文話」の総題のもと掲載された 11 編、すなわち鴎外の創作活動初期の文章から、大正 5（1916）年 4 月陸軍省辞職、予備役編入後に発表された「渋江抽斎」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』1916 年 1 月～5 月）はじめ一連の史伝作品にいたるまでの鴎外文学を理解する上で、ドイツ語「Resignation」を鍵語と捉え、その内実に迫った。鴎外の「Resignation」による創作活動の淵源と諸相を考察することによっ

て、鴎外文学における〈国民文化〉創生を論じた。

（7）近代日本の知識人が〈文化主義〉提唱にいたる歴史的・思想的背景を明らかにするとともに、その展開の諸相を確認することをめざしている本研究課題に関連して、上田敏、小山内薫ら 27 人が森鴎外に宛てて送った書簡 92 通の解読を進め、解説を執筆した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 林　正子	４．巻 第49号
２．論文標題 木村小舟による〈少国民文化〉の創生ーー「岐阜通俗圖書館」設立の背景と意義	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	６．最初と最後の頁 17-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林　正子	４．巻 第110号
２．論文標題 鴎外文学におけるハイネの影響ーー〈分身〉による社会批評と文学活動	５．発行年 2022年
３．雑誌名 鴎外	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林　正子	４．巻 第50号
２．論文標題 近代日本〈国民童話〉におけるドイツ文化受容の意義ーー巌谷小波〈お伽噺〉における〈メルヘン〉の反映	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	６．最初と最後の頁 69-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 林　正子	４．巻 第48号
２．論文標題 占領期岐阜の〈文化主義〉ーー小木曾旭晃と『地方文化』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	６．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林　正子	4．巻 51
2．論文標題 森鴎外「標準於伽文庫」編纂の意義――巌谷小波、馬渕冷佑との交流を視座として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	6．最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林　正子	4．巻 52
2．論文標題 〈Resignation〉による森鴎外の創作力――「鴎外文話」から史伝まで	5．発行年 2023年
3．雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	6．最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　7件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 林　正子
2．発表標題 占領期日本の〈文化国家〉建設――小木曾旭晃の〈地方文化〉論
3．学会等名 日本比較文学会第50回中部大会（シンポジウム）
4．発表年 2021年

1．発表者名 林　正子
2．発表標題 木村小舟と小木曾旭晃――岐阜の文芸雑誌による〈国民文化〉の創生
3．学会等名 おとなのための岐阜学講座（岐阜県図書館）
4．発表年 2021年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 鴎外文学におけるハイネの影響ーー〈分身〉による社会批評と文学活動
３．学会等名 鴎外研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 巌谷小波〈お伽噺〉における〈メルヘン〉の反映ーー近代日本〈国民童話〉におけるドイツ文化受容の意義
３．学会等名 日本比較文学会第51回中部大会（研究発表）
４．発表年 2021年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 鴎外「標準於伽文庫」編纂の意義ーー巌谷小波との往還による成果
３．学会等名 日本近代文学会東海支部シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 濃飛の文化人、小木曾旭晃ーー明治・大正・昭和〈地方文壇〉の輝き
３．学会等名 岐阜県図書館岐阜学講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 明治・大正・昭和、美濃ゆかりの文化人②〈少国民文化〉の創生－木村小舟と「岐阜通俗圖書館」
３．学会等名 長良川大学・図書館講座（ぎふメディアコスモス）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 明治・大正・昭和、美濃ゆかりの文化人①〈岐阜文壇〉の輝き－小木曾旭晃と雑誌『地方文化』
３．学会等名 長良川大学・図書館講座（ぎふメディアコスモス）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 飛山濃水の文学－森田草平『煤煙』の〈故郷〉と江夏美好『下々の女』の〈故郷〉
３．学会等名 オープンカレッジ in 飛騨 2022（飛騨・世界生活文化センター（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 藤村の〈故郷〉と〈鴎外〉――『桃の雫』を中心に
３．学会等名 生誕150年記念 島崎藤村リレートーク（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 馬渕冷佑と『日本お伽集』――森鴎外との交流を中心に
３．学会等名 岐阜県図書館岐阜学講座（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 林　正子
２．発表標題 〈Resignation〉の創作力――「鴎外文話」から史伝まで
３．学会等名 日本近代文学会関西支部春季大会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 小倉斉・酒井敏・林正子・増田祐希	４．発行年 2021年
２．出版社 文京区立森鴎外記念館	５．総ページ数 150
３．書名 文京区立森鴎外記念館所蔵　森鴎外宛書簡集３〈うーお〉編	

１．著者名 井口貢・安元彦心 編著（分担執筆：林正子「舟橋聖一『白い魔魚』の映画化））	４．発行年 2022年
２．出版社 風媒社	５．総ページ数 155
３．書名 岐阜の昭和30年代を歩く	

１．著者名 石川巧・大原祐治 編（分担執筆：林正子「岐阜県・『地方文化』） 	４．発行年 2022年
２．出版社 金沢文圃閣 	５．総ページ数 217
３．書名 占領期の地方総合文芸雑誌事典 上巻 （東日本編 北海道から三重県） 	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関